

与謝野鉄幹・晶子主宰「明星」の最終の同人誌『冬柏』

——異彩の同人 井上蒼溪について——

西村 富美子

与謝野鉄幹・晶子の主宰する新詩社の同人誌『明星』第一期・第二期の精神を継いで刊行された最終の同人誌『冬柏』は前者の二誌を継承する面もあつたが実質的にその内容はかなり大きく変化の様相を呈したものになっている。

掲載の作品は短歌を主としたが、それ以外の詩・俳句・散文(随筆)・また絵画等の広範囲にわたる作品が先行の前二者をはるかに凌ぐものがあつた。更に形式・体裁等も「みすばらしい」と主宰者自らが評するようにコンパクトであり、営利を目的とせず同人による作品を中心とした点は『冬柏』最大の特色であろう。我等の自分達の、言へば徹底した「自作自演」の雑誌という強烈な意識また自負が随処に現れている。だがその知名度は前二誌に比して低いというよりその存在すら専門家以外には知られていなかった。創刊の時期は推定可能だが終刊は何時であつたのかも判然としなかつた。

その直接的な背景には第一に時代という物理的な要因があつた。昭和初期の発刊、最終刊は昭和二十七年(一九五二)であり、日中戦争また太平洋戦争等の戦争の甚大な影響を受けている。特に後者の昭和十六年(一九四一)開戦、終戦の昭和二十年(一九四五)、戦後の七年間という社会全体の激動苦難の時期を通して刊行された数少ない雑誌の一つである。雑誌の紙材の調達困難さは『冬柏』を見れば一目瞭然であり、総冊数こそ一九一冊を数え、『明星』二誌また『すばる』

等を優に超えるが表紙・紙質・頁数等ははるかに及ばない。創刊の五年後に鉄幹が没し十二年後には晶子が世を去り、主宰者であり師であつた兩人亡き後、十年間も出版し続けたのは、メンバーには常時出入りこそあれ同人達の増加と熱意が掲載の作品と経済的な支えでもあつた。先行の新詩社同人誌にひけをとらないのは先に挙げた広範囲の作品と主宰者自らの厳正な作品の選択・校閲・校正の姿勢であつた。また投稿者の多彩な顔ぶれも特色の一つである。例えば、与謝野夫妻以外の主な作者・同人を挙げると、

尾崎罌堂、広川松五郎・石井柏亭・有島生馬・正宗得三郎・梅原龍三郎・山下新太郎・中川紀元・津田青楓・三宅克己・山城正忠・安井曾太郎・藤島武二・堀忠義・田中悌六、佐藤春夫・北原白秋・吉井勇・久保田万太郎・徳田秋声・斎藤茂吉・高浜虚子、堀口大学、木下李太郎・吉田精一・塩田良平・池田亀監・久松潜一・藤田徳太郎・竹友藻風・新村出・山田孝雄・奥野信太郎・古城貞吉・高田保馬・茅野蕭蕭、深尾須磨子・小金井喜美子・近江満子・桑野信子・岩野喜久代、平野万里・赤木毅・新居格・白仁秋津・江南文三・掛貝芳男・内山英保・関戸信次・西田猪之助・菅沼宗四郎等の政治家・作家・学者・画家群といった知名度の高い錚々たるメンバーが『冬柏』の作者、異色の作者であり枚挙に暇がない。

与謝野鉄幹・晶子主宰「明星」の最終の同人誌『冬柏』

与謝野鉄幹・晶子主宰「明星」の最終の同人誌『冬柏』

本稿では上記のメンバーには数えていないが『冬柏』の中で異彩中の異彩の作者、井上苔溪に焦点を当て同人誌『冬柏』の一つの特色について試論を展開してみたいと思う。

『冬柏』はその多くが「明星」時代からの作者であるが、井上苔溪の場合は『冬柏』に始まり『冬柏』に終わっており、所謂著名人ではないが主宰者と謝野夫妻とほぼ同世代の人であったということも取りあげた一つの理由である。

まず最初に苔溪の履歴について述べておくが、『冬柏』の作者については個人の年譜、歌集等で社会的な履歴の分かることが多い中で苔溪の場合は例外と言っても過言でなく、その足跡は諸々の資料を参考のうえ把握したものである。

苔溪の生卒年は

明治一〇年（一八七七）、昭和二年（一九四七）、享年六九。

ちなみに与謝野夫妻の生卒年は、

寛は、明治六年（一八七三）、昭和一〇年（一九三五）、享年六二。

晶子は、明治一年（一八七八）、昭和一七年（一九四二）、享年六三。

生年は晶子に近く両者の間であるが卒年は苔溪が最も遅く晩年の三年ほどは病床にあったが六九歳の長寿であった。

出生地・山口県徳山市富岡町

学歴・東京大学法学部卒 明治三九年（一九〇六）

職歴・大蔵省税務官（初任）

最終職歴・横浜税関長 昭和二年（一九二七）～四年（一九二九）

退官後・台湾銀行常任監査役 昭和二年（一九三七）

新詩社の社友歴については、同人となったのが昭和四年（一九二九）、五二歳。終生新詩社の同人であった近江満子と同期の加入で、横浜税関長を退職した直後であり夫人の満寿栄も同人だが参加の時期は不明である。また家族については、第一九卷春季号に載せる苔溪死去後の家族一同の挨拶状によって知ることができる。

東京大学法学部、高等文官試験出で大蔵省から税関長、は稀な履歴を持つ同人であり学識教養を重んじる鉄幹は親近感を抱く人物として苔溪をみていたのではないだろうか。当時『冬柏』はすでに刊行されていたが、苔溪自作の短歌が初めて掲載されたのは第一巻四号（昭和五年六月刊）である。

最初の掲載歌は「芭蕉の葉陰（上）」と題する一九首の短歌で、明の妃の植ええつる茄冬^{あかぎ}しげれるを見ればその世も遠からぬかな

（以下台南にて）五首

船ならで車ながらに涉りけり溢寮川^{いっせうがは}の幾すちの水

（以下台湾の南部にて）四首

阿里山^{ありざん}のみどりの世界ひろがりぬ螺線を描きて汽車の登れば

（以下阿里山にて）一〇首

等の台湾を歌題にした短歌で、

続いて五号（七月刊）に「芭蕉の葉陰（下）」の歌題の二九首の短

歌が掲載される。

池に倚る二十八戸のあはれなる蕃社の民のうたふ杵歌^{きねうた}

（日月潭にて）五首

花蓮港浪のしぶきを浴びながら船を出づれば人あまた見る

（花蓮港にて）四首

走ること猿にひとしく掛けごゑは化鳥^{けりう}の如し蕃^{ばん}の山駕籠

（太魯閣峽にて）五首

棕櫚^{しんちゆう}の心籐^{しんとう}の芽なども膳にあり蕃のさかひの温泉の宿

（台東附近にて）七首

たそがれの汽車の涼しき台南の青田のうへをしら驚の飛ぶ

（台湾の各所にて）六首

十九にて学びし町を車よりその世の夢も載せつつぞ行く

（長門の長府にて）二首

苔溪の『冬柏』の同人としてのスタートは台湾を歌材とする短歌であった。

以後第一六卷二号（昭和二〇年二月）までの一五年間、総計回数約一一〇回、計約三五〇〇首の短歌が掲載された昭和一〇年（一九三五）には第五卷二号（昭和九年二月）までの短歌を整理摘録し、歌集『山の苞』を出版している。

晶子の言葉を借りれば、寛は苔溪に対して師弟を超えた深い友愛の情を持ち旅に苔溪が不参加の時の寛の寂寥感に晶子も感じるほどであったという。

なお苔溪の死後、第一九卷春季号には家族から寄せられた苔溪の遺稿が掲載され追悼号の意味を兼ねており苔溪に対して特別扱いの感を受ける。

ちなみに、『冬柏』は各巻の各号の終わりに「消息」「書翰一束」「冬柏」だより、などの記事を書けるが、その内容を詳細に逐えば同人及び家族たちの動向また詳細な消息が分かるのも『冬柏』の特色の一つである。

新詩社の吟行の旅には与謝野夫妻に必ず同行する複数の社友がおり苔溪もその一人であった。察するところ、寛と苔溪は年齢の近いこと、異種の職業であったが高等文官試験合格組のエリート高級官僚であったこと、晶子も評価する豊かな人間性等が師弟の距離を縮める親密な交流の理由と思われるが、寛と苔溪にはさらに別の共通感情があったのではないだろうか。その点について筆者の考える所を次に述べてみたい。

○
苔溪は第一二巻（昭和一六年）まで実に精力的に短歌を投稿し続けたが、第一三巻二号（昭和一七年一月刊）から掲載の作品の質が突如として大きく変化を見せる。すなわち短歌以外の作品「試みに漢詩を訳す」と題して中国の漢詩の短歌調の翻訳を連載し始めたのである。

与謝野鉄幹・晶子主宰「明星」の最終の同人誌『冬柏』

短歌を主とする雑誌に漢詩それも短歌調の翻訳を掲載するのは異例のことなのだが、『冬柏』は短歌以外の作品、詩、隨筆、評論、劇の脚本、外国文学の翻訳、絵画等も掲載する極めて豊富な投稿内容の自由で門戸の広い同人誌ではあったが、漢詩の短歌調の翻訳はやはり異色中の異色と言ってよいだろう。第一三巻二号から第一四巻七号までは毎号欠かさず連載している。一回に詩を二篇以上載せ、詩題六二、詩数六六首、大半が七言・五言の古詩、律詩などの長篇の詩であり膨大な量である。其の後も連載の意欲は衰えることなく第一五巻八号まで続いている。（昭和一七年一月～一八年六月、昭和一八年一〇月～一九年七月、約二年半）。最終の（二三）は第一九卷春季号（一号）に掲載なのだがこれは苔溪の死後の遺稿で実質的には苔溪追悼号である（昭和三年四月）。

掲載の事情は第一三巻二号の平野万里宛の苔溪の書簡に見える。
〔万里宛尺牘一束〕（昭和一七年一月二七日刊）

最近漢詩を愛読しておりその翻訳を思い立ったので、微力で原作を冒読する程度のものであり発表するほどのものではないが、次号の第一三巻二号（翌年の一月号）から掲載を希望する旨の願いを述べている。（昭和一六年二月二八日の日付）、そして翌一七年一月号から「試みに漢詩を訳す」の連載が始まる。

先ずこの最初の三首の漢詩の歌訳を例として挙げてみよう。

① 試みに漢詩を訳す（一） 井上苔溪

幽州新歳作 張説

去歳荆南梅似雪。 去歳 荆南 梅 雪に似たり

今年薊北雪如梅。 今年 薊北 雪 梅の如し

共知人事何嘗定。 共に知る 人事は何ぞ嘗て定まらん

且喜年華去復來。 且つ喜ぶ 年華 去り復た來たるを

邊鎮戍歌連日動。 辺鎮の戍歌は連日動き

京城燎火徹夜開。京城の燎火は夜を徹して開くならん

遙遙西向長安日。遙遙として西のかた長安の日に向かい

願上南山壽一杯。願わくは南山の寿一杯を上らん

訳歌

薊北の雪梅に似ぬ荆南の梅を雪とも去年見し我れに

あら玉の年たちかえり嬉しけれ人の身の上定めなければ

夜を明かす都の燎火思ふかな防人の歌今日も聞きつつ

南山のことぶきを祝ぎ杯を遠き都の天にささぐる

張説は後に左丞相と為り燕国公に封ぜられた中唐の大官である

が、之れより先き事に因て岳州に貶せられ、転じて檢校都督と為

り幽州の軍を統督することとなった。岳州即ち荆南と幽州即ち薊

北と氣候風土の異なつた地方を転転とした所懐を年頭の作詩に陳

べ、遙かに京師の新歳を追慕して聖寿の万歳を祝したのである。

此の人には別に幽州夜飲の詩がある。悲壯の心を以て辺將と為つ

たことを自ら慰めたものである。

※七言八句の原詩を、「五七五七七」調の四首で訳し、厳密には原

詩一句また二句対照の訳ではないが前半四句・後半四句に分けた短歌

訳にしており、原詩七言八句に対して短歌四首での意識的な歌訳であ

る。解説については多少訂正を要する。張説(六六七―七三〇)は、

則天武后・中宗・睿宗・玄宗の四代の天子の時代を生きた文人であり、

中央朝廷の高位高官から地方官左遷へと天子の交代のたびに政敵に憎

まれ政争に破れて何度となく境遇の転変をくり返した。学識また詩文

の才に秀で人格的にも信望が篤く「宰相文人」と評された中唐期では

なく初・盛唐期の文人である。また「檢校都督」職ではなく岳州刺史、

幽州都督への左遷であった。「荆南」は岳州(湖南省岳陽)、「薊北」

は(薊州・河北省薊県の附近、幽州、今の北京あたり)をいう。なお

岳州刺史・幽州都督に左遷されたのも「燕国公」に封ぜられたのも同

じ玄宗の時期であり、辺境の地幽州で迎えた新年に都長安への篤い思

い感慨を述べた詩である。

幽州での作として苔溪の挙げる「幽州夜飲」の詩は五言律詩の詩で

ありともに『唐詩選』に見える。

② 春 歸 杜甫

苔徑臨江竹。茅簷覆地花。

別來頻甲子。歸到忽春華。

倚杖看孤石。傾壺就淺沙。

遠鷗浮水靜。輕燕受風斜。

世路雖多梗。吾生亦有涯。

此身醒復醉。乘興即爲家。

苔徑江に臨む竹、

茅簷地を覆う花

別れし来り頻りに甲子、

歸り到れば忽ち春花

杖に倚つて孤石を看、

壺を傾けて浅沙に就く

遠鷗水に浮んで静かに、

輕燕風を受けて斜めなり

世路梗ぐこと多しと雖も、

吾が生亦た涯り有り

此の身醒め復た酔う、

興に乗じて即ち家と為さん

浣花溪苔むす細き路通ふ岸に臨める竹むらの中

散り敷ける門邊の花をなつかしく踏みて佇む草の屋の簷

草の庵立ち去りて後しきりにも干支改まり三年経にけり

歸り來て忽ちうれし我が家の花さき満つる春に逢ふこと

杖をつき石を見壺を傾けて酔ひて汀の沙を踏むかな

淵に浮き鷗しげし風をうけ燕かろかり翻りつつ

世渡りの道はしばしばふさがれど我が生も亦限りあるかな

醒めて酔ひ興に乗じて我が心おもむくところ家とこそせめ

杜甫は後年官を罷め所を漂浪した揚げ句草堂を成都の浣花溪に

結び蜀の鎮將嚴武の恩顧を受けていた処嚴武が京師に帰任したので梓州あたりを漂浪していた。然るに嚴武が再び成都に帰任したので草堂に帰臥することを得た。時恰も春であったので此の詩を春帰と題したのである。

※杜甫が成都に「浣花草堂」を作ったのは上元元年（七六〇、肅宗）、四十九歳の時であり漂浪の旅は以後も続く。その間成都尹の嚴武と詩の交流はしていたが嚴武が都に召還された後また漂浪の旅をしていた。広徳二年（七六四）二月、嚴武が成都尹として再び赴任して来るのを知り、三月に成都の浣花草堂に帰って嚴武の推挙により節度参謀他の官職に就いたころの作で五言排律（五言十二句）、五十二歳の作である。訳歌は同じ「五七五七七」調の形式だが、四句目まではそれぞれ原詩一句に一首、五句目以降は原詩二句に一首の短歌での訳で原詩十二句に八首の短歌訳をしており、苔溪は最初の四句を重視していたのではなからうか。杜甫はその後長安から帰り成都の嚴武の幕府に仕えたが、翌稱徳元年（七六五）正月、辞して浣花溪に帰り五月にまた漂浪の旅に出る。苔溪の解説の最初の「浣花草堂」造築の時期は異なる。

③ 蘇臺覽古 李白

舊苑荒臺楊柳新。 旧苑 荒台 楊柳新たなり

菱歌清唱不勝春。 菱歌清唱 春に勝えず

只今惟有西江月。 只今 惟だ西江の月のみ有り

曾照吳王宮裏人。 曾ては吳王宮裏の人を照らす

訳 歌

荒れ果てし。

姑蘇の臺にも春きたり。

柳の縁あたらしく。

菱とり船の歌澄みて。

与謝野鉄幹・晶子主宰「明星」の最終の同人誌『冬柏』

なやましきほど長閑なり。

やがて月出づ。こは曾て。

吳王の宮の人かけを。照らし出せし西江の月

吳王夫差は越に勝った余勢を以て姑蘇台の宮殿を営み驕奢を極

めた。越王勾踐は之に美人西施を贈って甘心を求め旁だ遊惰に耽

らしむる策に出で、雪恥の時機を狙ったわけである。後二句は衛

万の吳宮怨の末二句と全く同字であるのは暗合としても不思議で

ある。吳王宮裏人は西施を指したのである。

※李白の七言絶句である。紀元前四九四年、春秋時代の吳王夫差は越王勾踐を討ち亡父の仇を果たしたが、後は越王の策略によって贈られた美人西施との豪華な生活に明け暮れ、紀元前四七三年越王勾踐に滅ばされ自殺をしたという史実を題材にした詩である。姑蘇台は江蘇省蘇州の西にある姑蘇山上にあった。なお李白には七言絶句「越中覽古」の作もあり越王勾踐が吳王夫差と同じ末路をたどった内容の詩もある。訳歌は五・七、七・五を基調とするが定型の形式ではない。

（なお、苔溪の原詩は返り点、旧仮名遣いによる送り仮名を附しているが、筆者の便宜上原詩の返り点・送り仮名に従った書き下し文とした（常用漢字、現代仮名づかいによる。訳歌の漢字・仮名づかいは苔溪の原案のまま、※以後は筆者の補説）。
少し補説を加えるならば、

①張説、七言律詩 ②杜甫、五言排律 ③李白、七言絶句の三首で、三首ともに『唐詩選』に収録する有名な詩である。形式は原詩（返り点・送り仮名）、訳歌は五・七調か七・五調を用いて訳し、詩の作者及び内容について解説、の順序で漢詩を歌訳している。（二二）までの連載はすべてこの形式を踏襲している。

○ 苔溪が『冬柏』に掲載した「試みに漢詩を訳す」については、第一

与謝野鉄幹・晶子主宰「明星」の最終の同人誌『冬栢』

回の一例(①②③)を挙げるにとどめたが、次に全二回(二三回)の漢詩についての筆者の試論を述べるにあたって、一(二二)(二三)までの各回の詩題・作者・詩型等、及び掲載の巻・号、刊行年月を先に挙げておきたい。

〔試みに漢詩を訳す〕井上蒼溪

(◇は『唐詩選』所収)

作者	詩型	詩集	巻・号	発刊年月
一①幽州新歲作	張說	七律	◇	一三・二 一七・一
②春歸	杜甫	五排	◇	
③蘇臺覽古	李白	七絶	◇	
二①石壕吏	杜甫	七古	◇	一三・三
②烏夜啼	李白	七古	◇	
③遊子吟	孟郊	五古	◇	
三①旅夜書懷	杜甫	五律	◇	一三・四
②過香積寺	王維	五律	◇	
③西宮春怨王	王昌齡	七絶	◇	
④代舊將	賈島	五律	◇	
四①公子行	劉廷芝	七古	◇	一三・五
②宮怨	司馬禮	七絶	◇	
③送秘書晁監還日本	王維	五排	◇	
五①清平調詞三首	李白	七絶	◇	一三・六
(一)・(二)・(三)				・五
②買花	白居易	五古		
六①陪諸貴公子丈八…二首	杜甫	五律	◇	一三・七
(一)・(二)				・六
七①夏日李公見訪	杜甫	七古	◇	一三・八
②臨洞庭	孟浩然	五律	◇	
③故衫	白居易	七律	◇	
八①採蓮女	李白	七律	◇	一三・九
				・八
②舟行江州路作	白居易	五律		
③夜泊旅望	白居易	五律		
④客中月	白居易	五古		
九①尋陽紫極宮感秋作	李白	五古		一三・一〇
②南鄰	杜甫	七律		
③夜閑	元稹	五律		
④郡中即事	羊士諤	七絶	◇	
一〇①秋興二首	杜甫	七律	◇	一三・一一
(一)・(二)				・一〇
②返照	杜甫	七律	◇	
③逢病軍人	盧仝	七絶	◇	
一一①崔五丈圖屏風賦	李頎	七古	◇	一三・一二
②宿瑩公禪房聞梵	李頎	七律	◇	
③胡笳歌送顏真卿	岑參	七律	◇	
④南磧中題	柳宗元	七古	◇	
一二①閣夜	杜甫	七律	◇	一四・一
②夜坐吟	李白	七古	◇	
③聞笛	張巡	五律	◇	
④邯鄲冬至夜思家	白居易	七絶	◇	
一三①乾元中寓居同谷	杜甫	雜言	◇	一四・二 一八・一
②西山	常建	五古	◇	
一四①邯鄲少年行	高適	七古	◇	一四・三
②對雪	杜甫	五律	◇	
③陪張丞相自松滋	孟浩然	五排	◇	
一五①舟下夔州郭宿	杜甫	五律	◇	一四・四
②清明宴司勳劉郎	祖詠	五律	◇	
③憶長安	岑參	五絶	◇	
④鹽州過胡兒飲馬	李益	七律	◇	

一六①春江花月夜 張若虛 七古 ◇ 一四・五

②哀江頭 杜甫 七古 ◇ 一四・五

一七①登辨覺寺 王維 五律 ◇ 一四・六

②高都護驄馬行 杜甫 七古 ◇ 一四・六

③兩朱閣 白居易 新樂府

④黑潭龍 白居易 新樂府

一八①長安古意 盧照鄰 七古 ◇ 一四・七

一九①宜州謝朓樓餞別 李白 樂府 一四・一一

②山石 韓愈 七古 一五・二 一九・一

二〇①今夕行 杜甫 雜言 一五・二 一九・一

②靑石 白居易 新樂府

二一①羌村 杜甫 五排 一五・三

②白絲 杜甫 雜言 一五・八

二二①秋行官張望 杜甫 五古 一九・春 二三・四

二三①無家別 杜甫 五古 一九・春 二三・四

(二二)は「青田めぐり」を題にし、「試みに漢詩を訳す」(二二)と
いう標題は省略され、杜甫の詩の題を記す。二三は苔溪亡き後の遺稿
で、「試みに漢詩を訳す」の題はあるが、(二三)の回数は記していな
い。詩の内容も未定稿)

以上挙げたように、苔溪が選択の対象とした漢詩はすべて唐詩であ
るが、各回で取りあげた詩の数は一定ではなく(二二)(二三)を除
いては二首以上である。作品の総数は六六首(詩題は六二)、詩人は
二五人でありその内訳を示しておけば、

○杜甫二一首(詩題一九) ○李白九首(詩題七) ○白居易九首

○王維三首 ○孟浩然二首 ○李頎二首 ○岑參二首

○盧照鄰・劉庭芝・張若虛・張說・祖詠・王昌齡・常建・張巡・高
適・李益・羊士諤・孟郊・韓愈・盧仝・柳宗元・元稹・賈島・司

与謝野鉄幹・晶子主宰「明星」の最終の同人誌『冬柏』

馬禮 各一首

杜甫が最も多く次いで李白、白居易の三人の詩人が続く。盛唐↓中
唐↓初唐↓晩唐の順であり盛唐・中唐が大半を占め、順当な詩人の選
択である。詩型は律詩・古詩が大半(五言律詩、七言古詩、七言律詩
の順)で、絶句の少ないのは予想外であった。

五古七首 七古一首 五律一首 五排四首 七律一首
五絶一首 七絶九首 雜言四首 新樂府三首

詩人、詩型の選択は苔溪の好みが選択の基準のようだが、杜甫・李
白・白居易の詩また絶句より比較的長い詩を選んでるのは漢詩愛好
者としての水準の高さを思わせる。詩の選択はどのようなテキストか
ら選んだのか関心のあるところだが、『唐詩選』が主な対象ではある
が白居易や中唐以後の詩を収録しないテキストなので複数の選集によっ
たかと思われるが未だ確定できていない。唐詩に強い関心を持って
いたが他の時代の詩に対する知識もあったようである。死の数時間前まで口ず
さんでいたという詩は漢代の「古詩十九首」の一首である。

苔溪の「試みに漢詩を訳す」最後の作(二三)は苔溪が亡くなっ
た後の遺稿である。死の直前までこの原稿を執筆し完成しなかつた未
完の原稿であり遺族によって寄稿されたのであろう。一二回までと同
じく原詩と訳歌だが、返り点・送り仮名及び解説はない。(書き下し
文は筆者による)

試みに漢詩を訳す 井上苔溪

無家別 寂寞天寶後 園廬但蒿藜

我里百餘家 世亂各東西 寂寞たり 天寶の後 園廬 但だ蒿藜

我が里は百余家

存者無消息 死者爲塵泥

世乱れて各おの東西す

存者は消息無く

死者は塵泥と爲る

賤子因陣敗 歸來尋舊踪

賤子 陣の敗るるに因り

歸り来りて旧溪を尋ぬ

久行見空巷 日瘦氣慘悽

久しく行きて空巷を見る

日 瘦せて 氣 慘悽たり

但對狐與狸 豎毛怒我啼

但だ狐と狸に対す

毛を豎てて我に怒りて啼く

四鄰何所有 一二老寡妻

四隣 何の有る所ぞ

一二の老寡妻

宿鳥戀本枝 安辭且窮棲

宿鳥は本の枝を慕う

安んぞ辞せん 且く窮棲するを

方春獨荷鋤 日暮還灌畦

春に方たりて独り鋤を荷い

日暮れて還た畦に灌ぐ

縣吏知我至 召令習鼓鞞

縣吏 我の至れるを知り

召して鼓鞞を習わしむ

難從本州役 内顧無所攜

本州の役に従うと雖も

内に顧みるに携うる所無し

近行止一身 遠去終轉迷

近く行くも止だ一身

遠く去らば終に転た迷わん

家郷既盪盡 遠近理亦齊

家郷 既に盪尽す

遠近 理 亦た齊し

永痛長病母 五年委溝谿

永く痛む 長病の母の

五年 溝谿に委つるを

生我不得力 終身兩酸嘶

我を生むも力を得ず

終身 兩つながら酸嘶す

人生無家別 何以爲丞黎

人生 無家の別れ

何を以てか丞黎と為さん

譯 歌

天寶の後さびしけれ家屋敷よむぎあかぎの生ひ茂るまま
我里の家百あまり世亂れて西に東に人散りにけり

ながらふは音づれを絶ち死したるは塵にまみれて泥とこそなれ
古里の道を尋ねぬ戦ひに敗れて落ちて帰りし男

行き行けど道に家なし人け無し日かげかそけく空の氣すこし
逢ふは唯狐と狸毛をたてて我を怒りて啼く如きかな

見まわして近きあたりに何かある老いしやもめの一人か二人
棲み慣れし枝を慕ひて鳥宿る縦へくるしき癖なりとも

春になり鋤を荷うも獨りなり暮れて帰りに畦に水注す
我が此處にあるを縣の司ども知りて召し出で太鼓習はず

携ふるもの顧みて何もなし本土にありて服従するも
征くところ近くば裸一貫をただ我れ官に捧ぐべきのみ

もし遠く此處より去らんものならば終にますます迷ふ外なし ○
ことわりは遠きと近き亦ひとし古里すでに滅びにければ
我心永く痛みき長く病む母を谿間に棄てて五年
我を生み力得ずして母と子と共に泣くのみ身を終るまで
世の人の生きて家なく別るるをなど民草となすを得べけん

※杜甫の五言古詩(三二句)であり、苔溪の訳歌は一七首である。
原詩二句に対し「五七五七七」調の短歌一首の訳歌だが原詩二句に対
し短歌二首での訳がある(○印)。

この「無家別」の詩は杜甫の「新婚別」「垂老別」と併せて「三別」と称される、別離を主題とする三部作の一首である。唐の玄宗の末期に勃発した安史の乱で兵役に徴発される人民の悲哀を描いており、独り残される新婚の妻(「新婚別」、老人まで徴発される悲劇(「垂老別」、家族のない者が故郷と別れる悲しみ「無家別」)を詠う。三首はどれも三二句の長い詩で、残酷で厳しい社会批判の詩である。

苔溪が最後に選んだこの詩の解説を書き終えずに擱筆した長いこの古詩は極めて暗い世相、人民の苦難を描いた詩であるが、昭和二〇年(一九四五)ごろの作とすれば、当時の日本の実状のなかで病床にあった苔溪の心境を反映する選択といえるのではないだろうか。

○
苔溪の歌人文人としての後半生の生涯の中で、歌集『山の苞』を出版したこと、同人誌『冬柏』に自らの願望であった漢詩の歌詠を掲載したこと、この二つは苔溪の人生にとって大きな成果であった。さらにこの二大イベントに不思議に符合する事柄があるように感じる。処女歌集『山の苞』出版と寛の死、「試みに漢詩を詠す」連載開始後間もなくの晶子の死、苔溪は二人の師を自身の記念すべき時期に失っている。鉄幹は歌集出版の時は、序を書くべく病院に筆記台用の「画板」まで持ち込んでいたがその希望は叶わなかったという。

与謝野鉄幹・晶子主宰「明星」の最終の同人誌『冬柏』

「試みに漢詩を詠す」に関しては晶子がどのような気持ち反応を示したかは記されていない。すでに病臥中であつたためなのか疑問の残る所である。『冬柏』に限らず雑誌の発行は時代とともに厳しくなり、紙の入手、戦局とともに厳しくなる検閲、紙頁の制限といった条件の中で超大量の投稿原稿の掲載の可否は問題視されなかつたのか、謎である。だが苔溪の漢詩に対する興味知識等は注目すべきものがある。漢詩の作者でもあつた師の寛と共有した感情があつたのではないだろうか。漢詩について両者が共通の話題にしたことは記されていないのであくまで推論に過ぎないが、想定外ではないように思える。

さて漢詩の歌詠であるが、漢詩の歌詠また詩詠は他に例のないわけではなく、井伏鱒二、佐藤春夫の例もあるにはあるが、漢詩の日本語訳(韻文による)には様々の困難があり簡単に評価を出すことは不可能ではないかと考える。ただ新詩社の浪漫派の歌調による漢詩の訳はやはり漢詩の作品が適当な質的な問題が前提として存在するのではないだろうか。歌詠をする対象の漢詩の選択を優先することがまず考えられるべきであり、苔溪の漢詩の訳歌についても同様のことが言えるのではないかと現在の筆者の見解である。

最後に『冬柏』と漢詩、ということでは、苔溪は自作の漢詩は作らなかつたが、以前に筆者が論じた鉄幹以外の漢詩が一〇首ほど掲載されている。それについては稿を改めて述べることにしたい。
(なお文中の年月は元号にとどめ、西暦年を表記していないところがあつた。)

〔注〕

(1) 井上氏のご病状はご長男照丸氏が別項に書かれましたが、井上氏は歌歴的に観るならば冬柏の園に育ち冬柏の土に還られた方であると云えましょう。枯淡潔白な中に一面非常に諧謔に富まれて、寛、晶子両先生をいつも爆笑おさせしたのも、氏の持つ自然のご性

与謝野鉄幹・晶子主宰「明星」の最終の同人誌「冬柏」

質でありました。先生の御末女藤子様がまたよき諧謔家で時時たち打ちが初まりますと傍から晶子先生が「藤子も井上さんのお弟子になれますね、どうです、名取りになったら。「苔藤」と云ってね、ハハハハ」とお笑いになった或日のシーンを思い出します。横浜の税関長、という先入観が私どもの頭に在ったせい初めは怖い小父さまとのみ思い込んでおりましたが何十回となく旅を御一緒につづけて居りますうちに、私などは自分のトランク迄平気で持つて頂くようになり、私も名取りとまでは行かなくても冗談を返すにはいいお相手をつとめたものでありました。あのしみじみした令夫人にお目にかかって一別以来の御話を交わしたく思っております。苔溪居士の冥福を衷心よりお祈り致します。(近江満子) (第一九卷春季号「冬柏」より) 昭和三年四月刊

- (2) 苔溪の出生地については、○山口県徳山市下上字内谷、○山口県都濃郡富岡村、等の説がある(住居表示の変更があるかも知れない)。東京在住の際は、東京都渋谷区伊達町五九(昭和一三年ごろ)。苔溪は東京大学法学部卒、かつての高等文官試験合格者で、エリート高級官僚でありその点からも新詩社のなかで異色の同人であった。
- (3) 苔溪が新詩社の社友となったのは横浜税関の菅沼宗四郎(四五歳)の紹介で、苔溪は税関長の職にあつたので年齢(五二歳)から推測して恐らく在職中の上司であつた。年齢的にかなり遅い入門であつた。
- (4) 都べの煙となりて消えんより

山所の土に帰らんとする苔溪(昭和十九年作)

父井上徳太郎 疎開以来郷里において病氣療養中のところ養生叶わず十二月二十二日午前八時永眠いたしました 時節柄葬儀は近親のみにて執り行いました(法名 雨月院徳蒼苔溪居士) 茲に亡父生前の御厚誼を深謝いたしますと共に謹んで御通知申し上げます

昭和二十二年十二月二十五日

山口県徳山市下上字内谷

妻・満寿栄 長男・照丸 次男・晴丸 三男・嘉丸

長女・清子

- (5) 苔溪の家族については、妻・井上満寿栄(新詩社の同人)、長男・照丸、次男・晴丸、三男・嘉丸、長女・清子。なお、長男の照丸氏(一九〇七〜一九六八)は、旧制京都三高、大学は?『追憶記』(三秀舎)刊行(筆者未見)。次男の晴丸氏(一九〇八〜一九七三)は、東京大学農学部農業経済学科卒、農林省。筆名・立田信夫。立命館大学教授(一九五九、横浜在住)、苔溪の歌集『山の苞』の装帧。

(6) 『冬柏』創刊は昭和五年(一九三五)三月。

- (7) (上)(下)併せて四八首(下)の最後の二首は苔溪の故郷山口県での作)の短歌は、昭和五年四月、五月に台湾を旅行した時の作品『歌集山の苞』の著者後記、昭和一〇年二月二〇日記)。なおこの「後記」には、昭和五年四月から昭和九年一月までの与謝野夫妻を中心とする苔溪及び同人たちの行動、吟行が詳細に記されている。『冬柏』所載の台湾での短歌の一部は『山の苞』の「神馬」の項に収める。

- (8) 苔溪が歌集『山の苞』を出したのは昭和一〇年四月、『山の苞』の「著者後記」によれば、苔溪の父も歌を詠むことを唯一の楽しみとしていた、という。苔溪自身は昭和三年から歌を学び始め、菅沼宗四郎が横浜短歌会を起し与謝野夫妻を招聘して教えを受けたのに参加し東京に移住した時に新詩社に入門した、と述べ、昭和五年に「冬柏」刊行以来誌上に発表した歌が二〇〇首(実際には約一七〇〇首)に達した中から六百有余首を選んで上梓し以後の作歌生活の出発点としたいと出版の意図を説明する。また昭和五年四月以来昭和九年一月まで、師の与謝野夫妻、新詩社の同人達との旅行行遊の際に詠じたものを収録し約五年にわたる行動の日程を逐一記

録している。もとは寛が序文を書く予定であったが三月に寛が急病死したことに代わって晶子が十首の「序歌」を寄せ、「山の苞の終り」にその事情を書いている。苔溪との交流、人間性についても評価した内容である。(『山の苞』)

(9) 同人の松永周二が『冬柏』(第六卷八号、昭和一〇年八月)に、「苔溪子の『山の苞』」と題する長文の批評文を寄せ書中の短歌を引用しつつ独自の論を展開している(昭和一〇年七月二十九日)。

(10) …井上苔溪氏の第一歌集「山の苞」が三月中旬に出版せられます。何れも自費出版で非売品になっています。こうして新詩社の諸友の歌集が統統と出版せられる事を何よりも嬉しく思います。(晶子)。(第六卷三号、「消息」)

(11) 『山の苞』の「山の苞の終りに」(晶子)

(12) 苔溪の遺稿は、漢詩の歌訳(杜甫の「無家別」)及び「谷の此の日向ぼっこもかえり見で冬街道を急ぐ太陽」の一首を初めとする「留守居」の短歌九首で苔溪の遺族が「冬柏」に寄せたもの。また終生の歌友菅沼宗四郎の「悼苔溪夫人」の詩(五章)も併せ載せる。

(13) 疎開以来気管支拡張のため、病床にあった父苔溪は、今年初夏の頃やや小康を得たようでしたが、その後気管支肺炎の症状が進み、ペニシリンもストレプトマイシンも療病三年の衰弱を支えることが出来ず、去る十二月二十二日朝七十の歳をまたず「雨月院徳譽苔溪居士」として古里の山かげの土に帰りました。父は臨終の数時間前にも無名氏の古詩「生年不滿百、常懷千歲憂、昼短苦夜長、何不來燭遊、為樂當及時、何能待來茲……」を誦したりしておりまして「世の中のゆとりを創る」よき意味の現実主義に徹した生涯であったように思われます。療養中歌作は思うに任せなかつたようですが、病氣少康中の詠草若干、身辺ノートに書きつけられていたものを、亡父最後の想い出にもと御送り申上げます。昭和二十二年十二月三十日。(井上照丸)『冬柏』第一九卷春季号「書翰一束」の項)昭和

二十三年四月

(14) 「消息」欄は、寛の生前は寛・晶子の連名、また編集者の平野万里、寛亡き後は晶子、平野万里、他の同人達、晶子亡き後は平野万里、近藤満子や他の同人達によって「書翰」「冬柏だより」の項が書き継がれる。

(15) 内山英保の『冬柏山房抄』に「良寛の巻」の歌題の短歌九首を収める。

(16) 拝呈。御無沙汰いたし候処、愈々御清勝の御事御同慶に奉存候。さて古今朗詠集後割愛にあづかり、□有拝受仕候・古今の秀歌を常住坐臥簡便に、車上にても、吟賞し得る機会を与えられ吾吾なまけ者は、大いに重宝致候。結構自分の醜き姿を調うる鑑に致度ものと存、以てご好意に酬い度存候次第に御座候。次に小生近來漢詩を愛読致し居り、此頃其翻訳思い立ち試み申候。素より微力至難の事にて、徒らに原作を冒流すのみにて、他に御目にかくる値なきものと存候えども、この一月号より冬柏に掲載させてもらい度存候間、御了知相成度候。先は御礼旁勞得貴意候。大東亜戦火快捷つづきにて、御同慶の至りに存候。師走二十八日(井上苔溪)。(『冬柏』第一三卷二号「万里宛尺牘一束」(昭和一七年一月二七日刊))

(17) 『冬柏』掲載の「試みに漢詩を訳す」(一)〜(三)までの漢詩の「詩題」、掲載の巻・号、年月日を記しておく。(二)(三)の表記は苔溪の生前の投稿、(二)(三)は家族が寄せた遺稿。

(18) 「古詩一九首」一五(『文選』卷二九、「雜詩」の項) 生年不滿百、常懷千歲憂

生年百に満たざるに、常に懷く千歳の憂い
昼短苦夜長 何不來燭遊
昼は短きに夜の長きに苦しまば、何ぞ燭を乗りて遊ばざる
為樂當及時 何能待來茲

樂しみを為すは当に時に及ぶべし、何ぞ能く來茲を待たん

与謝野鉄幹・晶子主宰「明星」の最終の同人誌『冬柏』

与謝野鉄幹・晶子主宰「明星」の最終の同人誌『冬柏』

愚者愛惜費 但為後世嗤

愚者は費えを愛惜して、但だ後世の嗤いと為る

仙人王子喬 難可与等期

仙人の王子喬、与に期を等しうす可きこと難し

人生には限りがあり仙人王子喬のような不老長生は望めないのだからその時その時を楽しむべきだとの意。「古詩一九首」全篇に共通するのは有限の人生、はかない人生を詠う内容で、蒼溪の「世の中のゆとりを創る」よき意味の現実主義に徹した、という子息照丸氏の父の評価と相通するものがある。「古詩一九首」制作の時期は不詳だが、漢代の作かといわれ後世の詩（五言詩）の制作に影響を与えており、蒼溪の漢詩に関する造詣の深さを示す。

(19) 西村富美子「与謝野鉄幹と漢詩―『冬柏』時代の漢詩人 与謝野寛」東海学園 言語・文学・文化 第十号 平成二十三年三月